

時間副詞体系に関する言語類型論的研究：文法化の観点から

守屋哲治\*

堀江薫\*\*

\*金沢大学教育学部

\*\*東北大学大学院国際文化研究科

moriya33@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

1. はじめに

事象の継続や変化を、発話時と、発話時とは異なる別の時点との関係で表す副詞(以下「時間関係副詞」)は、日本語では「まだ」と「もう」の2語の体系をなしている。

- (1) a. 彼はまだここに住んでいる。  
b. もう宿題は終わった。

それに対して英語では *already*, *yet*, *still*, *anymore* の4語がこのような体系を構成していると考えられる。

- (2) a. I have *already* met him.  
b. I haven't met him *yet*.  
c. He *still* lives here.  
d. He doesn't live here *anymore*.

日本語では継続を示す「まだ」と変化を示す「もう」が対をなす体系になっているのに対し、英語では継続を表す語として *still*, *yet* が、変化を表す語として *already*, *anymore* が存在している (Moriya 1988)。

本研究では、なぜこのような体系の違いが生じているのかを、これらの語を生んだ文法化 (grammaticalization) の原理をふまえて明らかにしていく。

2. 日英語の時間関係副詞体系の比較

本節では、英語の体系と日本語の体系がどのような点で異なっているのかをより詳しく分析する。

2. 1. *already*, *still*

*already*, *still* は基本的に肯定文に用いられる。

- (3) a. They *already* know his answer.  
b. He is *still* working.  
c. He is *still* not working.

*still* の場合は (3c) のように否定文で用いられる場合もあるが、その場合には否定辞の前に置かれ、否定の状態が継続しているこ

とを示す。

疑問文に用いられる場合には、肯定の答えを予想するような文脈で用いられるのが普通である。

- (4) a. Have you *already* finished reading the book?  
b. Are you *still* reading this book?

(4a,b) のような文は通例肯定の答えを予想あるいは前提として発話されるため、驚きなどを示す修辞疑問の効果を持つ場合もある。それに対して、そのような含みを持たない疑問文には *yet* が用いられる。

- (5) a. Have you finished reading the book *yet*?  
b. Are you reading this book *yet*?

このように *already* と *still* は通例肯定文に用いられ、否定文においても否定の作用域の外に限定され、疑問文でも通例肯定の答えを予想される場合に限られるなど、用法がかなり肯定的な文脈に限定されているという特徴があることがわかる。

2. 2. *yet*, *anymore*

肯定的文脈で用いられる *already*, *still* と相補的に分布するのが *yet* と *anymore* である。*anymore* は標準英語では否定文でのみ用いられる。また、*yet* は否定文で用いられるほか、(5) の例で見たように中立的な疑問文でも用いられる。

- (6) a. Mary doesn't work here *anymore*.  
b. I haven't finished reading it *yet*.

2. 3. 日本語との比較

英語では主として肯定的文脈で用いられる *already*, *still* と、否定文あるいは疑問文などで用いられる *yet* と *anymore* が、ある程度相補的分布をしているが、日本語の場合にはこのような役割分担は見られない。

- (7) a. 私はもう彼に会った。  
(= I have *already* met him.)  
b. 私はまだ彼に会っていない。  
(= I haven't met him *yet*.)  
c. 彼はまだここに住んでいる。

(= He *still* lives here.)

d. 彼はもうここには住んでいない。

(= He doesn't live here *anymore*.)

(7a-d)は(2a-d)の英語に対応する日本語であるが、「まだ」は *still, yet* に、「もう」は *already, anymore* に対応していることがわかる。<sup>1</sup> つまり「もう」は *already, anymore* に共通の「事象の変化」を示す機能を持ち、「もう」は *still, yet* に共通な「事象の継続」を示す機能を持つと考えられる。

同じ意味領域を表すのに、日本語では「変化」と「継続」を示す語が一对になっているのに対し、英語の場合は文の極性により「変化」と「継続」を示す語が二対存在していることがわかった。そこで、なぜこのような違いが存在するのか、また、言語類型論的にはどちらがより普通であると考えられるかについて文法化の観点から考察する。

### 3. 文法化と時間関係副詞

文法化 (*grammaticalization*) とは、語彙的意味を表す内容語 (名詞、動詞) が、文法的意味を表す機能語 (助動詞、接続詞等) に変化する現象で、その過程で客観的な意味から主観的な意味への変化が付随して起こることが知られている (Hopper and Traugott 1993)。文法化の研究は、言語類型論の分野で生産的に行われており、(Bybee, Perkins and Pagliuca 1994)、人間言語の変化の特徴の共通性、普遍性を理解する上で重要な手がかりを提供している。

「まだ」、「もう」、*already, yet* などの時間関係副詞は、ある事象が基準時点において、他の時点と比較して変化しているか、あるいは継続しているかを示す文法的機能を担っている (本研究で取り上げた日英語の時間関係副詞に関する詳しい意味分析に関しては、Moriya 1988 を参照のこと)。このような時間関係を専ら表す主観的な語が各言語にはじめから備わっていたとは考えにくい。むしろ、これらの語がより客観的な意味を表す語から文法化の過程を経て生じたと考えたほうが自然である。実際に両言語の時間関係副詞の語源を調査すると、全体的にはこれらの副詞がより客観的

な意味を表す名詞あるいは形容詞から派生していることがわかる。但し、どのような意味を表す語が源になっているかが、その語の辿る文法化の具体的な経路に影響を与えることがあることを考えると、前節で見た日英語の相違にも両言語の当該副詞の文法化の経路の違いが関わっているのではないかと考えられる。

そこで、まず個々の副詞がどのような過程を経て派生されたかを概観し、その派生過程の違いが、日英語の体系の違いとどのように関係するかを、文法化の原理を踏まえて考察することにする。

#### 3. 1. 日本語

「まだ」は「未だ」に由来しており、「未だ」の語源は「今+だ」、あるいは「い (接頭辞) +間+だ」のいずれかであるとされている。いずれにしても、「まだ」は時を表す名詞 (「今」あるいは「間」) を基体とし、接頭辞や助詞と一体化して文法化しているといえる。

「もう」については、助詞「も」を語源とする説と、「今 (ま)」から生じているとする説とがある。前者の場合は、すでに文法的機能を持つ助詞からさらなる文法化が起きているといえ、後者の場合には「まだ」と同じく時を表す名詞が基体となって生じた表現といえる。

日本語の場合には時という抽象的な概念を表す名詞が源になっている可能性と、「もう」の場合にはさらに助詞が源になっている可能性があることを見た。このような点に関して英語ではどのように異なるのかを次に見ることにする。

#### 3. 2. 英語

##### 3. 2. 1. *already, still*.

2 節で、*already, still* は主として肯定的文脈で用いられることを見たが、これらの副詞の語源に共通して見られる特徴が見られるのだろうか。

*already* の語源は *all+ready*、すなわち「十分準備が整っている」という意味の形容詞句で、実際 14 世紀頃には *already* がこの意味の形容詞として用いられている例が存在する。

*still* は現代英語にも存在する、「じっと

している」という意味の形容詞 *still* から生じたと考えられる。Oxford English Dictionary によれば、この意味での形容詞は古英語期の *Beowulf* ですでに見られるのに対して、「動かないで、じっとして」という意味の副詞が生産的に使われ出されたのが 11 世紀から 13 世紀、さらに「まだ」の意味に対応する副詞として用いられるのが 16 世紀以降である。これらのことから、時間関係副詞の *still* は、様態を表す形容詞を源とし、様態副詞を経てより抽象的な意味を表す副詞へと文法化したと考えられる。

*already*, *still* の文法化について共通する特徴は、いずれも観察可能な状態を表す形容詞を語源としているという点である。これは時のような抽象的な概念を表す名詞もしくは文法的機能をすでに持った助詞などを語源とすると考えられる「まだ」や「もう」などとは明らかに異なっている。

### 3. 2. 2. *yet*, *anymore*

*yet* の語源に関しては確定していないが、ドイツ語の *jetzt* との語形・意味的類似や、*yet* の他の用法などから、「現在」という時を表す意味と関連する語を源とすることが推測される。*anymore* は *any* + *more* という句が源となっており、それ自体は付加・繰り返しなどの概念を表しているが、*any* が否定対極表現として機能しているため、その概念が否定されて結果的に変化を含蓄していると考えられる。

このように、*yet*, *anymore* は *already*, *still* に比べるとより抽象的な意味を表す語あるいは句が源になっていることがわかる。

本節で見た日英語の各副詞の語源の違いが、文法化の道筋にどのような違いを生ずるのかを、文法化の原理をふまえて考察することにする。

## 4. 文法化の原理と機能の分化

Hopper (1991) は、多くの文法化の事例をふまえて文法化を特徴づける五つの原理を提示しているが、本研究で特に注目したいのは以下に挙げる二つの原理である。

**Layering (多層化)** : ある機能を表す領域で、新たな要素が既存の要素の他に付け加わっても、既存の要素が廃用にならずに新

しい要素と共存する (例 : 英語で未来を示す形式が *will*, *be going to*, *be -ing*, *be to* など複数共存)。

**Persistence (持続性)** : ある形式が語彙的機能から文法的機能を担うようになる時、その文法的機能と矛盾しない限りにおいて元の語彙的意味の痕跡が残存し、その形式の分布に制約を課す (例 : 西アフリカの *Ga* という言語の目的格標識 *k ε* は *take* の意味を表す動詞に由来しているため、「卵を産む」のように目的語が動作の結果生じるものである場合や、「彼女を見た」のように動作の結果、目的語が直接的には影響を受けないような場合には、用いることができない)。

この二つの原理から、ある文法的機能を担う語が複数存在し、源となる語彙的意味の違いによって異なる分布の制約が課されて共存するという事態がありうることが予測される。

英語において、*already*, *still* が性質・状態を表す形容詞に由来し、*yet*, *anymore* が時・数量を表す名詞あるいは形容詞に由来していることを見たが、性質・状態といった意味は、時・数量といった意味よりも、一層具体的な意味を表している。*already*, *still* が肯定的文脈に限定される傾向があるのはこのような語彙的意味が時間関係副詞としての分布に制約を課しているためと考えることができる。一方、*anymore* が *still* と同義で用いることができる方言が存在することや、*yet* が肯定・否定に関して中立の疑問文で用いられることなどを考えると、*yet*, *anymore* には本来語彙的意味からくる分布の制約はそれほどないと考えられ、先に見た制約は多層化による、*already*, *still* との共存のために生じたものではないかと推測できる。

この推測は日本語との対比によって蓋然性が高くなる。日本語の「まだ」、「もう」は時を表す名詞か、あるいはすでに文法的機能を持つ助詞に由来すると考えられ、いずれにしても *yet*, *anymore* 同様、語彙的意味からくる分布の制約がほとんどない。さらに日本語では英語と異なり多層化が生じなかったこともあり、この 2 語で体系化する

ことができたと考えられる。

次節では英語と系統的に近いドイツ語、日本語に系統的に近い韓国語の時間関係副詞について概観し、本節の議論の妥当性をさらに検証する。

## 5. ドイツ語・韓国語の時間関係副詞

### 5. 1. ドイツ語

ドイツ語で *already* に対応するのが *shon* であるが、これは *already* 同様、肯定的文脈に生起する傾向がある。語源的には英語の *beautiful* に当たる *shōn* に由来している。性質・状態を示す形容詞に由来している点も *already* と平行的である。*still* と *yet* に対応するのが *noch* であり、これは肯定的文脈に限定されていない。語源的には「今」という時を示す名詞に由来している。*anymore* に対応するのが *mehr* であり、これはちょうど英語の *more* に対応する語であるため *anymore* と同じような源を持つといえる。

ドイツ語では「変化」を示す語が肯定・否定で 2 語に別れており、「継続」を示す語が *noch* だけであるが、個々の語の文法化のパターンは前節で提示した考えと矛盾していないことがわかる。

### 5. 2. 韓国語

韓国語には「まだ」にあたる *ajik*、「もう」にあたる *imi* という副詞がある。いずれも肯定・否定いずれにも用いることができる点で日本語の体系と類似している。語源について確定的なことは言えないが、*ajik* が「今」にあたる名詞に由来しており、*imi* も「過去」にあたる概念を表す名詞と関連している可能性が高いと思われる。この点も日本語と類似している。

ただし、日本語と異なり *ajik* は「彼はまだ出発していなかった」のように過去完了を表す文や、「彼はまだ泣いていた」のような過去進行形を表す文では用いることができないという使用制限があるらしい。これは韓国語の副詞の源である「今」という抽象的な意味要素が残存して使用制限を課しているという可能性が考えられるし、日韓語の体系的な差が背後に潜んでいる可能性も考えられる。いずれにしてもより研究を深めていかなければいけない点である。

## 6. おわりに

本研究では、日英語の時間副詞体系の違いが、文法化の源となる語の種類の違いに由来すること、そしてその違いを生む文法化の原理がドイツ語や韓国語でも同様に作用している可能性が高いことを見た。

本研究で取り上げた文法化の原理の各言語での働き方が、当該言語の文法化の全体的傾向とどのように関連しているのかを探ることが今後の課題となる。

## 注

1. 疑問文における *yet* は日本語の「もう」に通例対応する。
  - i. a. *Have you finished homework yet?*  
b. もう宿題は終わりましたか。  
これは中立的な疑問文において、「継続」を示す副詞を選択するか、「変化」を示す副詞を選択するかの違いが原因となっていると考えられる。

## 参考文献

- Bybee, Joan, Revere D. Perkins and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Heine, Bernd et al. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hopper, Paul J. 1991. "On Some Principles of Grammaticalization." in Traugott and Heine (1991), 17-35.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Moriya, Tetsuharu. 1988. "Mada, Mo vs. Already, Yet, Still, Anymore: Comparison of Time Adverbs in Japanese and English." *Sophia Linguistica* 26, 101-111.
- Traugott, Elizabeth Closs, and Bernd Heine. (eds.) 1991. *Approaches to Grammaticalization*. Vol. 1. Amsterdam: John Benjamins.